

年間第十九主日

2016.8.7

ヘブライ人への手紙 11・1-2, 8-12

ルカ 12・32-48

今日は年間第十九の主日です。わたしたちの日本の教会は、8月6日の広島
の原爆の日から8月15日の終戦の日までを平和旬間とし、平和を願う全ての人々
と心をつなげて、わたしたちの国が経験した悲惨な戦争の犠牲となった無数
の人々のことを思い起こし、平和への決意を新たにすべく、深い祈りをささげ
ます。平和旬間中の今日の主日と来週の聖母被昇天の祭日、わたしたちが捧げ
るこのミサが、そのような祈りの心に満たされたものとなるよう、特別な思い
を込めておささげしたいと思います。

明日9日には、長崎は、浦上教会での早朝からのミサに始まり、終日深い祈
りに包まれます。日が落ちてからは、原爆被災者の慰霊祭が行われる平和公園
の同じ敷地に長崎教区の各教会からの信者さんたちをはじめ、日本の各地や遠
く海外から、この日のために長崎を訪れる多くの巡礼者の方々参集し、浦上教
会までたいまつ行列が行われ、平和祈願のミサがささげられます。長崎の原爆
の爆心地である、平和公園と浦上教会を結んでささげられる8月9日のこの夜
のミサが、広島から長崎へと受け継がれる、今年原爆の日の全ての行事、そ
こでささげられる無数の人々のいのりと平和への誓い、原爆の地から世界に向
けて発せられる平和アピールの全てを包み込み、最後を締めくくる、今なお真
の平和への遠い途上にある、わたしたちの地上からの神へ向けての祈りとなり
ます。このことには象徴的な意味があると思えます。それは、わたしたちが特
にこの8月にささげるミサと祈りは、原爆に象徴される、わたしたちの国と世
界の多くの国々を巻き込んだあの悲惨な戦争と、その中で理不尽にも奪われた
無数の人々の尊いいのちと、今なお癒えることのない耐え難い苦しみを強いら
れている人々の苦しみと、そして、あれから71年を経たわたしたちの世界の
現実と無縁のものであってよいはずがないということです。むしろ、その苦し
みの中から発せられる平和を求める全ての人々の真剣な祈りと結ばれた、その
祈りの全てを包含する、わたしたちが信じる神への祈りとならなければならない
ということです。

わたしたちがささげるミサは主イエス・キリストの十字架の死と復活を記念
する祭儀です。ミサをささげるたびに、わたしたちはわたしたちの目をしっか
りと主イエス・キリストの十字架に向けねばなりません。イエスの十字架は、
わたしたちの罪が生み出す無慈悲な残酷さの理不尽な犠牲となった全ての人
の苦しみと一体となられた神が、その人々の側に立たれ、自らもあのような姿を

わたしたちの眼前に曝すことによって、わたしたちの責任と頑なな心を問い詰めておられるお姿です。わたしたちがこの 8 月にささげるミサで、十字架のイエスの祭壇の前に身をかがめ、ささげなければならない祈りは、イエスの十字架のお姿が示している戦争の犠牲になられた無数の人々の死から目を背け、あのような死の中から今もわたしたちに向けて叫び続けているその人々のいのちの声に耳を傾けようとして来なかったことへの反省に立った、回心の祈りでなければなりません。わたしたちが信じるイエス・キリストの復活が指し示す、心ある人々が新たな決意のうちに目指し、願い求める真の平和の実現は、原爆に象徴される戦争がもたらす悲惨な結末とその犠牲となった無数の人々の苦悶の死と心の底から向き合うことなしには、到来するものではありません。イエスの十字架は、それが、神が与えてくださった他者のいのちを踏みにじって来た自分たちの愚かな罪のせいであると心から認めることができた者たちにとってのみ、救いをもたらす贖罪の死となるのです。

そのような反省と深い祈りに基づいて、わたしたちは平和を求める全ての人々ともに、それぞれの場で自分に出来る平和の実現のための努力を呼びかけられています。今日の福音は、今の時代を生きるわたしたちが皆、主人の帰りを待つ僕（しもべ）であることを、わたしたちに思い起こさせようとしています。その主人こそが、わたしたちすべての者が待ち望んでいる真の平和をもたらすことが出来るお方です。しもべたちに求められていることは、忍耐強く主人の帰りを待って、腰に帯を締め、灯火を灯して、目を覚ましていることです。しもべたちがあるべき緊張感を持って、時の流れの中に身を処すことが出来るのは、主人の帰りが前もって告げられているからです。その主人がわたしたちの世界にもたらしめてくださる真の平和を確信し、それがいつのことになるか分からない、わたしたちの今の時代の闇の中で、希望の灯火を灯し続け、押し寄せる絶望の睡魔と闘い続けて、新たな覚醒を生み出してゆくことが、わたしたちに課せられた、あの無残な戦争の犠牲となった方々への務めであると思います。平和の実現を求める全ての人々との共闘の中で、わたしたちキリスト者の役割りは、信仰に基づくこのような不屈の平和への信仰を生き抜くことであると思います。

今日の第二朗読のヘブライ人への手紙のことばをあらためて心に刻みたいと思います。

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」。この 8 月、あの戦争の犠牲となった全ての人々のことを想い、その人々の心と一つになってわたしたちが望むべきことは、真の平和な世界の実現です。その実現が、核廃絶への道程がなお気の遠くなるほど先のことに思える現状に象徴

されるように、わたしたちの目にはなお見えない先行きの中にあるとしても、腰の帯を締めなおし、消えそうな灯火を掻き立てて、真の平和の到来への希望を宣言し続けてゆかなければなりません。それが、戦後71年の今の時代を生きるわたしたちのキリスト者の務めだからです。

わたしたちが今日ここでささげるミサが、戦争の犠牲となった全ての方々と、その方々の平和を願った魂の叫びを受け継ごうとしている全ての人々の祈りと努力に結ばれたものとなるよう願って祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高